

社殿改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

白山神社古墳

2007年3月

高松市教育委員会

例 言

1. 本報告書は、社殿改築工事に伴う発掘調査報告書で、高松市木太町向井に所在する白山神社古墳の調査報告を収録した。
2. 発掘調査地ならびに調査期間は次のとおりである。

調査地：高松市木太町1479番地
発掘調査：昭和60年7月15日～7月27日
整理作業：平成6年10月1日、平成18年9月19日～9月29日
3. 発掘調査及び整理作業は高松市教育委員会が担当した。
4. 発掘調査は高松市教育委員会文化部文化振興課主事（当時）藤井雄三が担当し、同課非常勤嘱託（当時）江木麗子、末光甲正（調査委託）がこれを補佐した。整理作業は同課文化財専門員（当時）山本英之、同課非常勤嘱託中西克也が担当した。
5. 本報告書の執筆は、第2章を同課文化財専門員川畠聰、第1・3・4章を中西が行った。本報告書の編集は中西が行った。
6. 発掘調査から整理作業、報告書執筆を行うにあたって、下記の関係機関ならびに方々から御教示を得た。記して厚く謝意を表すものである。

香川県教育委員会、帯包昭十郎
7. 挿図として、国土地理院発行1/25,000地形図「高松南部」および高松市都市計画図1/2,500「木太2」を一部改変して使用した。
8. 本報告の高度値は海拔高を表し、方位は磁北を示す。
9. 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査の経緯	2
第2節 調査と整理作業の経過	2
第2章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	
第1節 調査の概要	5
第2節 遺構	6
(1) 墳丘	6
(2) 周溝	7
(3) 埋葬施設	7
(4) 出土遺物	9
第4章 まとめ	
第1節 埋葬施設の構造と構造	10
第2節 古墳の年代	11
第3節 周辺の塚	11

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

白山神社は、本太町向井に位置する神社である。菊理姫命を祭神としており、同町八坂神社の境外末社として地域の人々の信仰を集めている。神社は、石祠が高い台石の上に鎮座していたが、傷みが著しくなったため、関係者の方々によって改築されることになった。

その改築工事が施工され、頂上部を若干削平すると、多数の板状安山岩が検出され、その安山岩のいくつかには朱が付着していた。そのため、高松市教育委員会は埋蔵文化財包蔵地である可能性が高いと判断し、関係者と協議を行い、遺構の状況を確認するために発掘調査を実施することで合意した。発掘調査

は、本市教育委員会を主体に実施した。その結果、古墳であると確認したことから、包蔵地名を白山神社古墳と命名した。



第1図 遺跡位置図

第2節 調査と整理作業の経過

発掘調査は昭和60年7月15日から開始した。調査は、最初に安山岩の板石が散見する場所を中心にボーリング棒により埋葬主体を探査し、調査範囲を設定した。その結果、墳丘中央部において竪穴式石槨が1基確認された。次に、墳丘測量図を作成し、埋葬主体の調査を開始した。石槨は東側に大規模な盗掘坑があり、石槨の3/4は破壊されていた。石槧を完掘し、石槧の平面図・立面図を作成した。7月27日に埋め戻しを行い、全ての調査が終了した。調査途中の20日に地域の人々を対象とする遺跡見学会を実施し、多数の人々の参加があった。

整理作業は平成6年10月1日に図面修正と挿図の作成を実施し、「香川考古」第3号において古墳の概要と墳丘測量図・石槨実測図を報告した。

本報告書を作成するにあたり、新たに挿図を作成することとし、平成18年9月19日～29日に挿図の作成と報告書執筆を実施した。本書の墳丘測量図・石槨実測図は「香川考古」に記載された図面を一部修正・改変しており、本書をもって正式な報告書とする。



写真1 遺跡見学会の風景

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれた東西約20km、南北約16kmの範囲に及んでいる。また、この平野は、讃岐山脈から流下し、北へ流れ瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ本津川・春日川・新川などによって形成された扇状地でもある。調査地は、この扇状地の末端より、やや中央寄りに位置し、標高2~3mを測る。

さて、現在石清尾山塊の西を直線に北流する香東川は、17世紀初頭の河川改修によって一本化されたもので、古代以前においては香川町大野付近から東へ分岐した後、石清尾山塊の南側を回り込んで平野中央部を東北流する別の主流路があった。この旧流路は、現在では水田及び市街地の地下に埋没してしまったが、空中写真等から複数の旧河道が知られており、発掘調査によってもその痕跡が確認されている。調査地に隣接して流れる宮川も、旧流路の名残であるが、調査地南東で条里地割に沿って直角に折れ曲がっており、人工的な改変が加えられていることがうかがえる。

第2節 歴史的環境

高松平野中央部における最古の遺跡は、縄文時代草創期の有舌尖頭器が表採された大池遺跡である。しばらくの空白後、晩期の遺跡が発掘されており、木製農具が出土した林・坊城遺跡やさこ・長池遺跡、木器加工場であった居石遺跡等をあげることができる。

弥生時代前期に移ると、天溝・宮西遺跡、汲遣跡で集落をめぐる環濠が発掘されるとともに、上西原遺跡、さこ・長池遺跡、さこ・長池II遺跡で不定形小区域水田が見つかっている。中期になると、さこ・長池遺跡、さこ・長池II遺跡、井手東I遺跡で住居跡、周溝墓等を伴う集落の一部が調査されているが、規模、密度とも総じて希薄である。

弥生時代後期になると遺跡は數、規模ともに爆発的に増加し、天溝・宮西遺跡、円原遺跡のように十数棟の住居跡と大量の廐棄土器を伴う集落が出現する。こうした動きの中、木太中村遺跡のような低地においても居住域が広がっている。

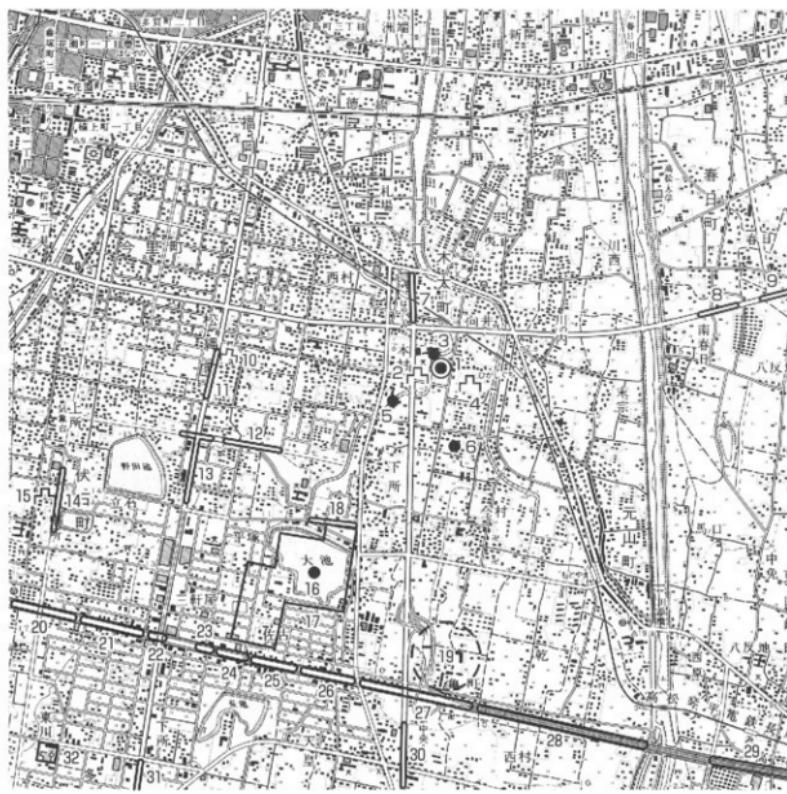
古墳時代では、これら弥生時代後期の遺跡が前期初頭に至るまで存続するが、その後に断絶が見られる。後期になると、木太中村遺跡で掘立柱建物跡などが見られるようになる。一方、古墳の分布状況を観察すると、石清尾山古墳群をはじめ、主に丘陵上に古墳が築造されている。そうした中にあって、平野部の低地に造られた白山神社古墳は、特異な例である。周辺には大荒神古墳をはじめ10数基の塚がかつて存在したという。神内城跡の調査では混入であるが石製軽車が出土している。

古代では条里造構が注目される。特に松繩・下所遺跡は7世紀代までさかのほる地表条里と同方向の道路状遺構を検出しており、飛鳥時代から現代に至るまで時代は様々であるが、条里地割施行が段階的に進んだことが明らかになりつつある。また、日本最古の莊園絵図として名高い「弘福寺領讃岐国山田郡田園」の北地区比定地が大池周辺に存在し、やや離れて木太中村II遺跡において同時期の井戸跡が検出されている。さらに、木太中村遺跡では、古代末~中世初頭において、畿内地方からもたらされた土器が出土しており、交易を考える上で重要である。

中世では、城館跡が多数知られている。白山神社古墳の西側にある木太南小学校の校庭は神内城跡の比定地である。神内城跡は、平成12年度の第1次調査では、15~16世紀の遺物を包含する幅2.6mの溝が検出され、城の北限を示すものと考えられている。神内城跡の東側には、土壘状の遺構が残る真鍋氏の向城跡が知られており、神内氏は十河氏方、真鍋氏は香西方の武将で、約300mしか離れていないところに城を築いていることが特徴的である。さらに、西へ日を転じれば、松繩城跡も存在している。また、キモンドー遺跡においては、佐藤氏の佐藤城跡の堀を検出している。

近世では、東山崎・水田遺跡、川南・東遺跡、川南・西遺跡において、春日川の氾濫による洪水砂層上

に営まれた集落跡が検出されている。また、この時期は大規模な土木工事が行われた時代であり、特に西鷲八兵衛による香東川の付け替えとこれに関連する木太町周辺の干拓と新田開発は注目できる。後に松平頼重による北側の干拓が行われ、ほぼ現在の海岸線となった。



- | | | | | |
|-------------|-----------------|-------------|------------|------------|
| 1 白山神社古墳 | 2 神内城跡 | 3 木太本村遺跡 | 4 向城跡 | 5 木太本村Ⅱ遺跡 |
| 6 大荒神古墳 | 7 木太中村遺跡 | 8 川南・西遺跡 | 9 川南・東遺跡 | 10 桜鶴城跡 |
| 11 天満・宮西遺跡 | 12 境目・下西原遺跡 | 13 松岡下所遺跡 | 14 キモンドー遺跡 | 15 佐藤城跡 |
| 16 大池遺跡 | 17 弘福寺領田園北地区比定地 | | 18 上西原遺跡 | 19 林下所遺跡 |
| 20 蛙股遺跡 | 21 居石遺跡 | 22 井手東Ⅱ遺跡 | 23 井手東Ⅰ遺跡 | |
| 24 さこ・長池Ⅱ遺跡 | 25 さこ・長池遺跡 | 26 さこ・松ノ木遺跡 | 27 林・坊城遺跡 | 28 六条・上所遺跡 |
| 29 東山崎・水田遺跡 | 30 宗高坊城遺跡 | 31 四原遺跡 | 32 渋佐遺跡 | |

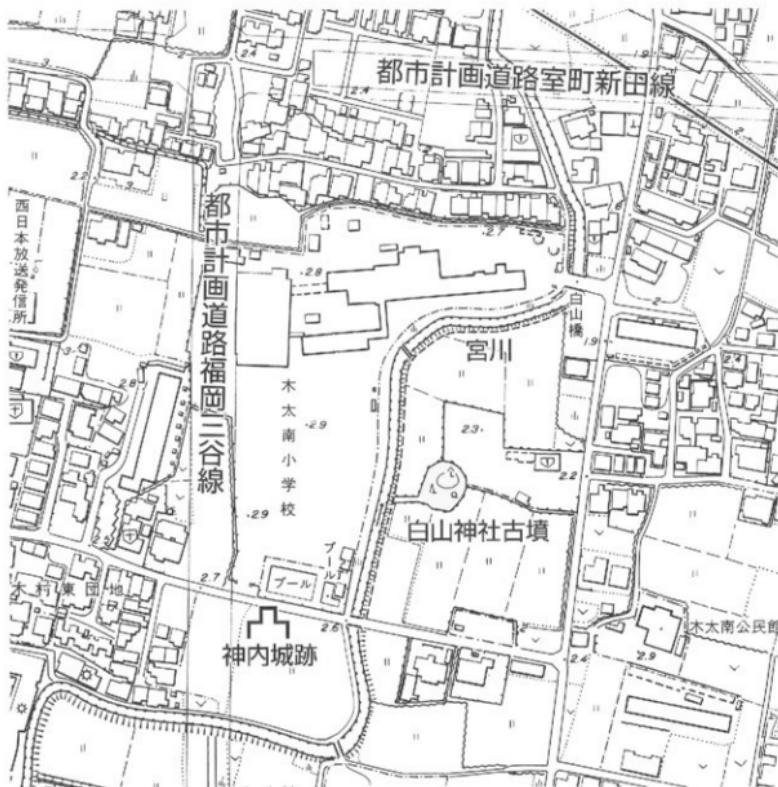
第2図 周辺主要遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要（第3図）

白山神社古墳は、木太南小学校と宮川を挟んだ東側に位置しており、周囲は標高2.30mを測る条里地割に基づく水田である。現況の古墳は東西方向の直径約11.00m、南北約12.55mを測り、平面形は南北方向にやや長い不整な円形に区画されており、水田面から約1.75m高い小規模な独立丘状を呈する。地域の人々は冗談話として、「白山神社は木太町で一番高い山である」と言っている。

本古墳は社殿の建設中に不時発見されたものであるため、調査面積や調査方法、調査期間に関して制約を受けた。調査区は埋葬主体を中心とした墳頂部に設定し、その面積は約20m²である。調査の方法は、最初に墳丘の測量を実施し、その後に埋葬主体の直上まで掘り下げ、遺構検出にあたった。そして、埋葬主体内部の調査を行い、完掘後に写真撮影と埋葬主体の実測を実施した。墳丘測量は平板測量による1/50図化を行い、埋葬主体の実測は手書きによる1/10図化を行った。



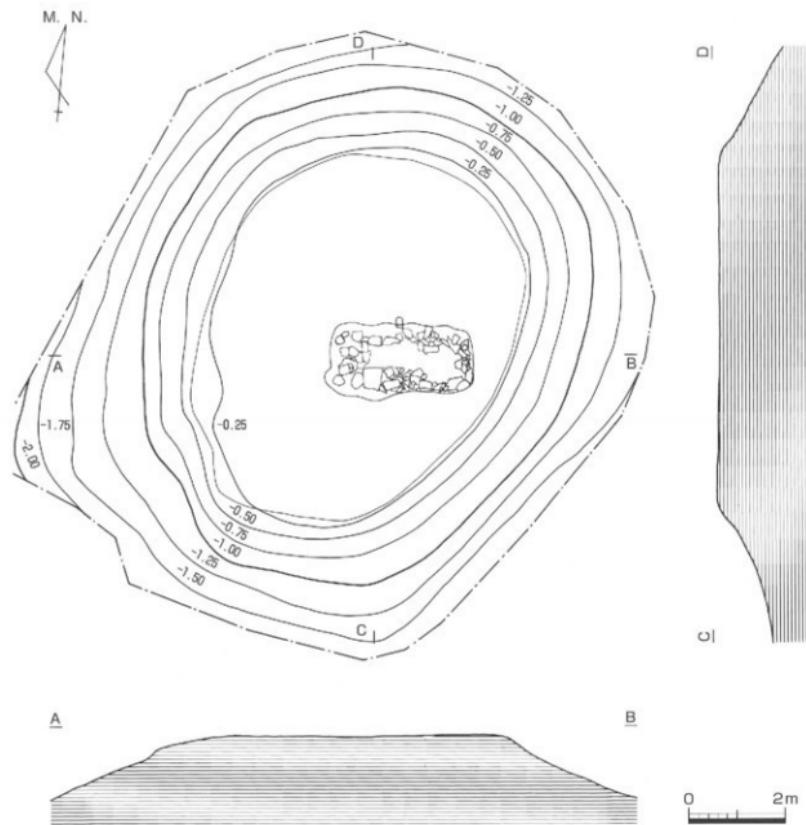
第3図 調査区位置図（縮尺1/2,500）

第2節 遺構

(1) 墳丘（第4図）

調査以前に墳頂部の中央には白山神社の小さな石の祠が鎮座しており、後世の削平を受けていると考えられた。事実、調査において埋葬主体の検出面までの深さは0.20mを測るにすぎない。このため、現在の墳丘が古墳本来の状況を残しているとは考えられず、墳丘の残存状況は良好でなかった。

現状の墳丘は、東西方向の直径約11.00m、南北約12.55mを測るやや不整な円形に区画されている。墳丘の裾部の標高は2.30m前後であり、墳頂部までの高さは1.75mを測る。すなわち、墳丘が非常に低い古墳であると考えられる。墳頂部は、北側が若干高くなっているが全体としては平坦であり、規模は東西方向6.20m、南北方向7.70mを測り、卵形に似た楕円形である。埋葬施設は墳頂部のはば中央に位置する。



第4図 墳丘測量図 (縮尺1/100)

墳丘の等高線はほぼ等間隔であり、傾斜は全方向ともほとんど同角度である。墳丘の盛土の状況は、調査期間等の制約と墳丘の遺存状況の悪さにより十分な調査が実施できなかつたため詳細な報告ができないが、埋葬主体の主軸方向とほぼ直行するトレントにおける上層観察では明確な構築は検出できず、單一層の盛土を確認した。

(2) 周溝

本調査では周溝は確認されなかつた。平成6年に香川県教育委員会が実施した小規模河川宮川改修事業に伴う調査では、本古墳の西側に周溝等の有無を確認する目的でトレントが掘削された。この調査においても周溝は検出できず、古墳に伴う遺物は出土しなかつたが、古墳が本来低い台地状の微高地に築造されていたことが判明した。明治時代の更正図を参考にすると、本古墳の北西裾に幅1m位の細長い地割りが確認できる。この地割りは古墳の裾を巡っていることから、周溝の痕跡である可能性も考えられる。のことから本古墳は前方後円墳である可能性が皆無ではないが、現在の古墳の状況から円墳であると考えられる。

(3) 埋葬施設（第5・6図）

埋葬施設は、墳頂部のほぼ中央に位置する豊穴式石槨である。石槨の主軸方向はN-94°-Wを示し、古い段階の遺跡の古墳に伝統的にみられる東西方向の埋葬施設主軸を採用している。以下、構築順に豊穴式石槨の状況を説明する。

墓壙

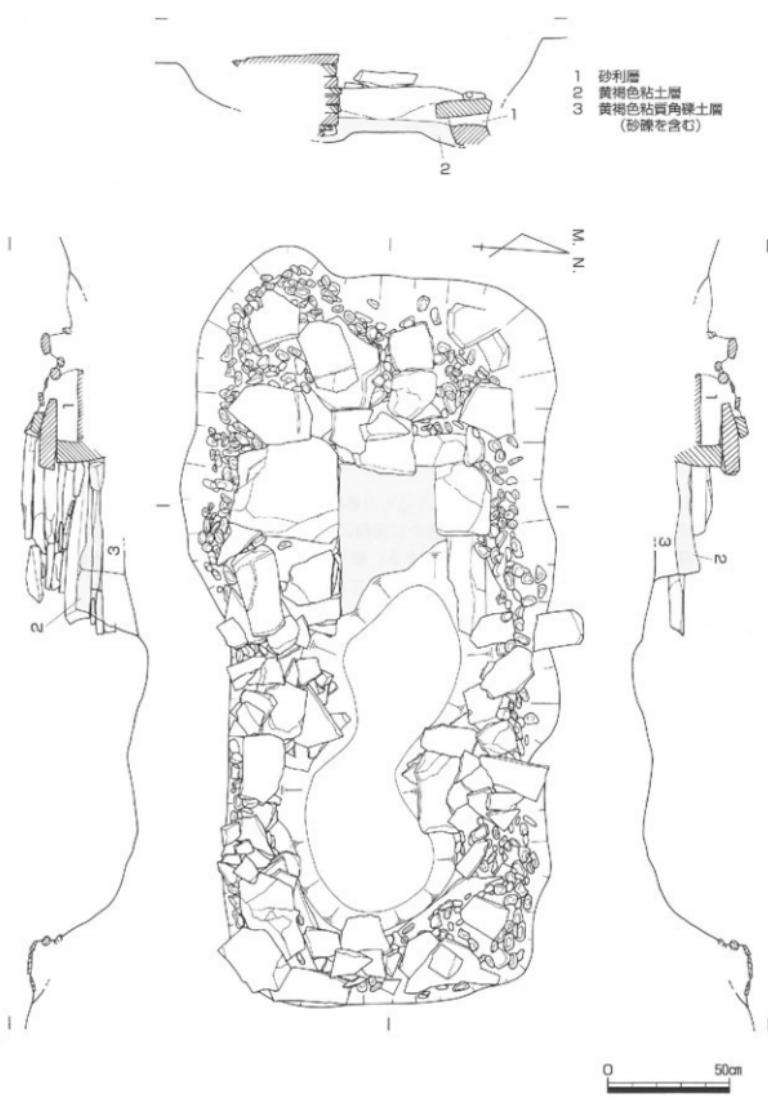
石槨の構築に先立つて、旧地表面を浅めに掘り込んだ墓壙が石槨よりやや広い範囲に築かれている。墓壙の平面形は長方形を呈し、南壁の西半分が僅かに南側に拡張する。その規模は東西方向の長辺2.98m、短辺1.53mを測り、検出面からの深さは0.45mである。掘り方の傾斜は緩やかであり、底面は中央部を掘り残し、側壁の1段目の石を置くべき部分はそれに応じて深く掘り下げている。

石槨

石槨は板状安山岩を積み上げて構築しているが、東側には後世の盗掘坑が掘り込まれており、石槨の内部は西端から約0.40mの範囲を除く東側が完全に破壊されている。石槨内法の規模は、東西方向の長辺が約1.80m、短辺が0.45m、検出面から床面までの深さは0.26mを測り、小形の豊穴式石槨である。平面形の長幅比が4.0で、やや細長い形態の石槨である。ただし、長辺の数値は、盗掘坑があるため正確な数値を計測することができず、東端に残存する石から西側小口までの長さである。

残存する範囲での石槨の構築状況は、小口部に長方形の安山岩を立て、両側壁は板状安山岩を最大で8段積み上げている状況が確認できた。側壁に使用された安山岩は長方形を呈し、その長辺部が石槨の内側になる長手積みにしており、側壁は垂直に立ち上がる。第6図に示したように、石槨内面は全面に赤色顔料が塗られている。南側の側壁の基礎石となる1段目の石は、全長0.70m、厚さ0.05mの大きな石である。3段目の石は全長0.61m、厚さ0.10mを測り、6~8段目の石は全長0.45m前後、厚さ0.05mを測り、大きな安山岩を使用している。これらに挟まれた2・4・5段目の石は小さな石が使われている。南側壁の西端付近は、最も遺存状態が良好である。対面する北側壁は、基礎石となる1段目と2段目の石のみ残存するのみである。1段目の石は南側壁と同規模の石を使用しており、2段日の石は全長0.29m、厚さ0.05mである。石槨の底面は黄褐色粘土を厚さ5~10cmに充填させている。粘土のレベルは西方向に僅かに下がっている。南側壁では3段日の石の中央まで粘土が埋まり、北側壁では2段日の石の下面まで埋まっている。しかし、側壁の石の間に粘土を充填しておらず、砂礫を入れている状況が確認できる。小口部には全長0.64m、幅0.18m以上、厚さ0.12mを測る安山岩を立て、外側と直上に0.30m角の安山岩を置いている。

側壁と墓壙壁の間には0.20~0.35m角の安山岩と直径5cm前後の小石をつめて控え積みを行っている。詳細に観察すると、小石は安山岩と墓壙との間に集中して検出されており、石槨の東壁と南壁中央から東側においては小石がほとんど見られない。控え積みの安山岩の間は砂礫層が充填されている。盗掘を受け



第5図 竪穴式石梯平面・立面実測図（縮尺1/20）

た石槨の東側には控え積みの安山岩と小石が多数検出されるが、原位置を保っている石は少ないと考えられる。これらの石の中にも赤色顔料が付着する石がある。

(4) 出土遺物

竪穴式石槨からの出土遺物は全く無く、発掘調査において出土した遺物は盛土中から数点の中世以降の土師質土器片が出土したのみで、古墳に伴う遺物は出土しなかった。

（参考文献）

香川考古刊行会1994『香川考古』

第3号

丹羽祐一・藤井雄三1988『高松の

古代文化』高松市立図書館



第6図 竪穴式石槨平面実測図（縮尺1/20）

第4章　まとめ

第1節 埋葬施設の構築と構造

今回調査した白山神社古墳は、調査面積が限定され、埋葬施設は盜掘を受けて破壊されている部分が大半であり、天井石も残存しておらず、埋葬施設の遺存状態は良好ではなかった。本文中でも触れたが、限られた範囲で埋葬施設の構築過程を整理しておきたい。

①墓壙の掘削

一般的な古墳の構築過程においては、墓壙の掘削に先立って地山の成形及び盛土の整備が実施される。しかしながら、本古墳の調査は埋葬施設に重点がおかれて、墳丘は現状保存されたことから、墳丘の調査は必要最低限であった。このため、詳細な部分は不明であるが、版築構造は確認できなかった。

墓壙は、墳頂部のほぼ中央に位置を決定し、掘り下げている。平面形はやや不整な長方形を呈する。底面の中央部はやや浅く、基底石を置く部分は深く掘削されている。主軸方向はほぼ東西方向である。

②小口部に板石の設置

小口部に安山岩の板石を1枚立てている。小口部の外側に板石を置いている。

③床面の構築と基底石の設置

墓壙の底面に粘土を5~10cm充填した後、基底石を粘土に埋め込んで設置している。小口部の板石と基底石によって埋葬空間が規定される。床面はほぼ平坦である。小口部の石は1/3程度埋められている。両側壁の基底石は安山岩を使用し、その形は長方形であり、その長辺部が石室の内側になるように設置されている。

④木棺の設置と側壁の構築

小口部の角や側壁の面の合い方から、箱型木棺の設置後に板状安山岩を積み上げて側壁を構築している。安山岩の長辺部が石室の内側になる長手積みにしており、側壁は垂直に立ち上がる。石室と壁石の間は砂礫が充填されている。

⑤裏込めの構築

石室と墓壙の間に砂礫層と小石を入れ、裏込めとしている。さらに、安山岩の板石で押さえている。

※赤色顔料の塗布

石室構築に用いた石材は一部控え積みに用いたものも含めて構築前に赤色顔料を塗っている。

通常の古墳の構築過程では、埋葬施設を構築した後に天井石の架構と盛土が行われる。しかし、本古墳は前述したように埋葬施設の側壁の上部より上がすでに消滅しているので、天井石の構築及び埋葬施設の上部構造は不明である。

本古墳の構造の特徴として、数点挙げることができる。

1. 内法幅が約4.5mであり、遺体を埋葬するには非常に狭いものであるが、粘土床上面がほぼ平坦に近い状況であることから木棺は箱型木棺と想定され、削竹形木棺を配置する構造は考えにくい。
2. 規模や小口部に1個の板状安山岩を立てるという構築方法から、箱式石棺の系譜を引くと考えられる小規模の堅穴式石室である。
3. 市内の古墳の中で堅穴式石室に赤色顔料が検出された古墳は、前期の鶴尾神社4号墳と前期末~中期初のかしが谷2号墳である。積石塚の前方後円墳である鶴尾神社4号墳はその規模・出土遺物等から、本古墳と全く異なる性格を有する古墳である。一方、かしが谷2号墳は所属時期や石室の規模、出土遺物の皆無等の点で本古墳と類似する。
4. 本古墳は標高2m台の平地に立地しており、県下の古墳の中では低い位置に作られた古墳のひとつである。後述するように周辺にはいくつかの古墳の存在が考えられ、白山神社古墳を中心とする古墳群が形成されていた可能性が考えられる。しかし、本太町を含めた平野部には本古墳に先立つ古墳は無く、系統を受け継ぐ古墳も存在していない。本古墳を中心とする古墳群は短期間に形成された可能性もある。このような意味で、本古墳は特異な存在の古墳である。

第2節 古墳の年代

従来、白山神社古墳は古墳時代中期、すなわち5世紀前半の古墳とする考え方が主流であった。藤井雄三氏は『高松の古代文化』の中で本古墳について「石槨の形から、5世紀前半と推定できる。」と記述している。また、「香川考古」第3号では、本古墳を和田晴吾氏の小期区分に基づく5～6期の古墳として掲載している。しかし、埋葬施設の構造からは5世紀前半と積極的に判断できず、これらの時期比定の根拠は明確ではなかった。高松平野において本古墳のような床面が平坦な小形堅穴式石槨の類例は、久米池南遺跡1号堅穴式石槨とかしが谷3号墳小型堅穴式石槨が挙げられる。これらの時期はかしが谷3号墳出土の直刀鎌から5世紀前半以前と考えられる。さらに、埋葬施設の構造をより詳細に検討すると、板状安山岩を使用した丁寧な長手積みや規模のわりには多量の粘土の使用がみられ、久米池南遺跡例やかしが谷3号墳例よりやや古い時期の要素をも持ち合わせている。出土遺物が無いので年代に関してこれ以上の絞込みはできないが、本古墳の石槨の構造・構築の検証とかしが谷2・3号墳・牛ノ鼻古墳をはじめとする県内の前期～中期の古墳との比較検討の結果、白山神社古墳は従来の考えよりやや古い時期の古墳である可能性を指摘できる。つまり、前期末頃～中期前半までの範囲に入る古墳であると考えられる。

第3節 周辺の塚

白山神社古墳の周辺には、第7図に示すように10基程度の塚がかつて存在していた。これらの塚の分布状況は、白山神社古墳より東側に5基が集中する北側グループと約80m南側に7基が存在する南側のグループがある。北側のグループは標高2～3m、南側は標高4m前後の平地に立地する。北側グループの東端に位置する蛇塚からはかつてガラス玉が出土したと伝わる。荒神さんの境内に存在する大荒神古墳は本古墳の石槨に使用されている板状安山岩が散乱する。他に巫女塚などの塚が存在していたが、ほとんどの塚は開墾等で消滅してしまった。それらの塚のいくつかは古墳であったと考えられる。



第7図 周辺の塚・古墳



埋葬施設完掘状況（北から）



埋葬施設完掘状況
(東から)



埋葬施設完掘状況
(西から)



石槨西端（北から）



石槨西側小口部（東から）



石槨南側壁（北から）



石槨北側壁（南から）



石槨側壁除去状況（北から）



石槨西側小口部石積状況（西から）



石槨基底石（東から）



墳丘現況（南西から）

報告書抄録

ふりがな 書名	はくさんじんじやこふん 白山神社古墳						
副書名	社殿改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第103集						
編著者名	中西克也						
編集機関	高松市教育委員会						
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2636						
発行年月日	西暦2007年3月30日						
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
白山神社古墳	香川県 高松市 木太町	37201	34°19'10"	134°04'30"	1985.7.15~27	20m ²	社殿改築
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
白山神社古墳	古墳	古墳時代 前期末~中期前半	墓壇、 堅穴式石室				
要約	標高2m台の平野に立地する古墳時代前期末~中期前半の円墳であり、墳頂上に堅穴式石室が1基構築されている。						

白山神社古墳

—社殿改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成19年3月30日

編集 高松市教育委員会

高松市番町一丁目8番15号

発行 高松市教育委員会

印刷 若葉プリント